



CFI ニュースレター C2023-11 「門は開かれている」

[今月の聖書]

「起きよ、光を放て、あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上へのぼったから。……………私は怒りをもってあなたを打たけれども、また恵みをもってあなたをあわれんだからである。あなたの門は常に開いて、昼も夜も閉ざす事は無い。これは、人々が国々の宝をあなたに携えて来、その王たちを率いて来るためである。」(イザヤ 60: 1.10.11)

「見よ、私は戸の外に立って、叩いている。誰でも私の声を聞いて戸を開けるなら、私はその中に入って、彼と食を共にし、彼もまた私と食を共にするであろう。」(ヨハネ黙示録 3: 20)

「私はあなたのわざを知っている。見よ、私はあなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにもかかわらず、私の言葉を守り、私の名を否まなかったからである。」(ヨハネ黙示録 3: 8)

そこでイエスはまた言われた、「よくよくあなた方に言うておく。私は羊の門である。私よりも前に来た人は、皆盗人であり、強盗である。羊は彼らに従わなかった。私は門である。私を通ってはいるものは救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。」(ヨハネ 10: 7-9)

「都は、日や月がそれを照らす必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都の明かりだからである。都の門は、終日、閉ざされる事はない。そこには夜がないからである。」(ヨハネ黙示録 21: 23.25)

お元気でお過ごしでしょうか。秋が深まって参りました。クリスマスのキャロルの声が聞こえますね。今月は「門は開かれている」と題して、神の希望の約束について、イザヤ書 60 章から学びましょう。2023 年は 1 月からイザヤ書をテキストとして学んで参りました。イザヤ書の特徴的な言葉のひとつは「門」です。

バビロンの門は鉄製で固く閉じられていました。いかなる敵もその門を破ることができませんでした。しかし、ペルシャの王クロスが来たときには、もはやその扉は開かれて、争うことなく入城したのです。それがイスラエルの 70 年の捕虜生活の解放の日となりました。解放された人々は、祖国に帰り、エルサレムの再建に尽くしましたが、見える現実には厳しかったに違いありません。しかし預言者イザヤは神の言葉をもって「その門は開かれている」と語ったのです。それはもはやイスラエルの城門ではなく、人類全ての人に与えられた救いと祝福の開門です。

さて、現在の私たちの社会は閉塞感に満ちています。逃げ道のないような、どうにもならない現実の前に立たされています。しかし信仰の目をもって開かれた門を見出したいと思います。不信仰は、私たちの心をネガティブにします。「見よ、私は戸の外に立って叩いている」(ヨハネの黙示録 3: 20)と、イエス・キリストが私たちの心の扉を叩いている姿が描き出されています。自分で心を閉ざして鍵を開けないのです。しかし今日聖書は心の扉を開きなさいと励まします。

人生にはたくさんの扉があります。そして天国に行くまでにはいくつもの門があるのでしょうか。開かれたら進もうと思っても開かれないものです。信じて叩く時、開かれるのです。まさに毎日私たちが大きなビルや銀行に行く時、入り口で経験していることです。近づけば開きます。信仰は自動扉のようですね。昼も夜も、閉ざされることのない栄光の門に入って、神様の恵みをたくさん受け取りたいと思います。祝福を祈っております。

(お知らせ)

* 9月 18 日(月)大阪クリスチャンセンターにおける「喜びの歌を共に大阪集会」においては、高らかな賛美が捧げられました。長時間の録音なので特別編集版ですが、CD、DVD を発行致します。是非その感動を味わってください。

(CD 2000 円、DVD 4000 円)

* 12 月 5 日 19 : 00 「メリークリスマス 2023」を中目黒の GT ホールで致します。座席数が限られておりますが、ぜひおいでください。(入場券 1000 円、席上献金あり)

「あなたが道を行く時、行く手は一足毎にあなたの前に開かれる」
第四十二「自由訳」

主は信仰に満たされた旅行者の足の下でなければ、決して信仰の橋をかけたまわらない。もし主が一步先きに橋をかけたもうとすれば、それは決して信仰の橋ではない。目に見えるものは信仰ではないからである。

いなかには時々、ひとりで開く門がある。それは道のかたわらに堅くしつかりとつくられていて。もし旅行者がその仕掛の手前で止まるならば、それは決して開かない。しかし彼がその馬車を進めて、車輪が道路の下に仕かけてあるバネを押すと門は開き、彼が通過するとまた元通りになる。彼は閉ざされている門に向かって進入しなければならぬ。彼は閉ざされてはいる門に向かつて進入しなければならぬ。そうでなければ門はいつまでも閉ざされている。

このことはわたしたちがゆくすべての義務の道において出会うあらゆる妨げを通過する場合の方法を示している。川でも、門でも、山でも、すべて神の子供らはそれに突進すべきである。もしそれが川であるならば、あなたがたの足をその流れに踏み入れる時に水がとぎれる。それが門であれば、これに接近する時におのずから開ける。山であれば大胆に直面する時に、その山は海に移るのである。

今あなたがたの前に義務の道をふさぐ大きな妨げがあるか。主の名によつて進んでいきなさい。そうすれば山はどこかへいってしまふ。
—ヘンリー・クレイ・トラムブル

いたずらにわたしたちがすわつてなげく時、全能者の声は「立ちて永遠に進みゆけ」とひびくのである。わたしたちは大胆に進んでいこう。よしそれが夜であつて、道をはつきりと見わたることができなくても、わたしたちが進む時に、道は開け、森の中の小道のように、またアルプスの道のように、一点から見ればとだえているように見えても、決して行詰まりはしない。進んでゆきなさい。必要ならば神は雲の柱、火の柱をもつて荒野を導きなさい。道には案内者もいれば宿屋もある。わたしたちは旅路の進むにつれて、食物と友とを発見することができる。「たとい、物事はどうなつても、旅人はひどく疲れることがあつても、喜ばしく、また楽しい歓迎のホームがある」とルサフオードはいみじくも言つた。

「見よ、開いた門が天にあつた。」

ヨハネは神の言葉とイエスの証しのために、淋しい、岩かどの多い、幽因のバトモス島にいたことを記憶すべきである。エペソのすべての愛する者から離れ、教会の礼拝からは遠ざけられ、意にかなわぬ捕虜仲間と交際させられていた時、これらの異象を受けた。そして彼のために天門が開かれた。

わたしたちは父の家から追放されたヤコブを思い出す。彼は眠りのために荒野に身を横たえ、夢の中で天と地をつなぐはしごと、その頂上に神が立ちたもうのを見た。

これらの人々ばかりではなく、なお多くの人々に天の門が開かれた。事情から言えば、彼らの境遇はこんな暗示には全くふさわしくなかつた。囚人や捕虜、苦痛の鉄鎖で病床につながれ絶えず苦惱しつづける者、淋しい巡礼者やさすらい人、家庭の反対によつて主の家から遠ざけられている婦人たちなどに対して、いかにしばしば天の扉が開かれたことであろう。

しかし、これには条件がある。あなたがたは御霊の中に在るといふことの何であるかを知らねばならぬ。あなたがたは心が清く信仰においては従順であらねばならぬ。イエス・キリストを知ることのすぐれたことのために、すべての物を損するを善しとしなければならぬ。そうすれば神はすべてとなり、わたしたちは神の恩寵の中に生き、また動き、また存在し、天の音がわたしたちに聞かれるのである。
—デーヴィッド・デボシー・コンメンタリー

あなたは小さい事に忠実であつたから……

(ルカ 一九・一七)

神は私たちに、日常のありふれた事柄に対して忠実な者とするによつて、更に大いなる職務に堪えるように備えられる。平凡な親切の實行を通して、神は私たちを、堂々とした任務に導いて下さるのである。私たちが示すほんのわずかな好意は、私たちが現在よりも更に高い尊敬を勝ち得る準備となる。小さな義務を軽べつする者は、それよりも重要な義務を十分に果たすことはできない。私たちの力は、小さな不従順によつて衰えるのである。私たちが互いに礼を欠いてゐるならば、それによつて私たちの神礼拝は妨げられる。

以上のように、私たちの生きる唯一の道は、各瞬間瞬間を誠実さをもつて過ごすことである。すべての事において忠実であるとき、私たちは、どんな事に対しても備えができてゐるのである。「あなたは小さい事に忠実であつたから」——これが道德的靈的進歩の原則であり、私たちはこの道を通して権力の座に上るのである。私たちが、現在の自分の仕事をいかげんにすることによつて、よい宣教師となるための備えをすることはできない。人生におけるすべての「石が」よく、真実に置かれてゐる」とき、私たちは、主が喜んでその中に住まわれる堅固な聖なる宮を確信するのである。私たちの偉大さは、私たちが「小さい事」に対してどのような態度をとるかにかかつてゐる。

荒野の泉

レテー・B・カウマン
山崎幸治訳

ヨシヤア記 3.

ヨシヤアは民をヨルダンを渡らうとして天幕をいで立ち、祭司たちは契約の箱をかき、民に先立つて行つたが、箱をかく者がヨルダンにきて、箱をかく祭司たちの足が水ぎわにひたると同時に、ヨルダンは刈入れの間、岸一面にあふれるのであるが、——天から流れくだる水はとどまらなはるか遠くのザレダンのかたわらにある町アダムにあたりで、うず高く立ち、アエバの海すなわち塩の海の方に流れくだる水は全くせきとめられたので、民はエリコに向かつて渡つた。イスラエルの民は、かわいた地を渡つて行く間、主の契約の箱をかく祭司たちは、ヨルダンの中のかわいた地に立つてゐた。そしてついに民はみなヨルダンを渡り終つた。

山頂をめざして

L. B. カウマン 編
松代幸太郎 訳